2　逃避行を越えて

－栗原貞子のライフヒストリー－

聞き書き：資料収集調査員　猪股　祐介

2004 年５月 30 日
ハルピンにて

栗原貞子（くりはら　さだこ）の略歴

大正 14(1925)年 12 月３日	岡山県赤磐郡可真村に６人兄弟の末っ子として生まれる
昭和 18(1943)年	県主催の拓植訓練会に参加し、満洲に憧れを抱くようになる
昭和 19(1944)年５月	東安省勃利県の東岡屯女子義勇隊訓練所に入所
同年 11 月 23 日	合同結婚式にて佐藤忠寿と結婚し、竜湖開拓団の一員となる
昭和 20(1945)年８月	ソ連参戦にともない、竜湖開拓団に避難命令がくだり、３ヶ月に及ぶ逃避行を余儀なくされる 途中開拓団とはぐれたのち、依蘭・勃利の収容所を経て、元の入植地にほど近い勃利県七台河の中国人集落に辿り着く
同年 12 月 10 日	董長勝と結婚する 前夫との間に男子１人、長勝との間に男子３人と女子２人をもうける
昭和 50(1975)年	一時帰国
昭和 55(1980)年	娘２人とともに自費にて永住帰国を果たす
現在	東京都内に在住

はじめに

８ヶ月という話であった。昭和 19(1944)年４月 28 日、栗原貞子は８ヶ月間、満洲で女子義勇隊の訓練を受けてくるつもりで、故郷をあとにした。そのときの貞子には、自分が開拓団に嫁いで「大陸の花嫁」となり、日本の敗戦後に中国人と結婚して「中国残留婦人」となることなど、知る由もなかった。「８ヶ月で帰る」、その思いとは裏

腹に、貞子が再び故郷の土を踏むのは、一時帰国を果たした昭和 50(1975)年のことであった。

１．女子義勇隊に参加するまで

生いたち

栗原貞子は大正 14(1925)年 12 月３日、岡山県赤磐郡可真村に、６人兄弟の末っ子として生まれている。父親は数反の畑を耕す小作農であり、副業に養蚕と桃の栽培を営んでいた。兄弟は貞子と 24 歳離れた一番上の兄を筆頭に、兄が２人、姉が３人あった。

昭和７(1932)年、可真村尋常小学校に入学し、昭和 16(1941)年に高等科を卒業したのちは、家の農業を手伝うかたわら青年学校に通った。桃の袋かけなどが貞子の仕事であった。

女子義勇隊への誘い

青年学校の卒業が間近に迫った昭和 18(1943)年、担任の先生から、岡山市である１週間の「拓殖訓練会」に行くように言われ、参加した。そこでの１週間は、朝起床ののち朝礼、弥栄三唱（いやさかさんしょう）や軽い運動をしたのち、朝食をとり、勉強するという毎日であった。勉強といっても、満洲に関する説明と女子義勇隊への勧誘である。満洲は一望千里の広大な土地であること、土地が肥沃で食糧も豊富であること、そしてその満洲では既に多くの青少年義勇隊が活躍しており、女子もそれに続いてほしいことなどを、聞かされたという。これら満洲や女子義勇隊の話に、貞子はすっかり魅了された。

> それ（満洲の話）はやっぱり魅力的だったな。山の中、私は山の中の小さい、まぁ井戸の中の蛙だろうやな。あはは。そういう大きなとこ見たこともないし、聞いたこともないっていうのが。（中略）日本人がむこういって、あのう、このう、みんなを指導する立場にね。そういう人に養成して。そう、だからいい人でなけりゃ行かせないと。まぁ考え方も悪い人なんかは行ったらだめだと。まぁなんかそういって、いい人行かすということ。（中略）だから、そういういいなんだったら、ぜひ行ってみたいなっていう私の希望。まぁ、あったよな。

満洲の他民族を指導する立場にたてる、優秀な日本人だけを選抜して「女子義勇隊」にするという話は、貞子の自尊心を刺激した。なお、このときは満洲開拓団で結婚するという、「大陸の花嫁」のたぐいの話は、一切でなかったという。

拓植訓練会から帰った貞子を待っていたものは、担任、校長、そして村長による、女子義勇隊への勧誘であった。女子義勇隊が国策であること、また岡山県で４名、赤磐郡で１名を確保しなければいけないことを理由に説得が繰り返された。貞子の気持ちは満洲行きに傾いていた。

まぁ宣伝で。大陸へ行け、男子はみんな義勇隊で行ってるからね。で、女子でも義勇隊としての名前をもらって行けるんだから、ぜひ行ってほしいと。まぁ、体は健全で、精神の、心の正しい、いいひとを選んで行かすんだからって。まぁ、そういう、ふふふ、言われたんだけどね。まぁ私としてはね、女でもお国のためになれるんだから、ぜひ行ってみたいなと思ったんだけど。

「女でもお国のためになれる」の「女でも」という表現には、男子と同じ義勇隊の名前をもらい、男子と同等にお国のためになれることへの願望がにじんでいる。女子義勇隊という名称がもつ意味は大きかったといえる。また、女子義勇隊には「体は健全」で「心の正しい」人材が選ばれるという点にも、やはり心動かされたようである。

さらに、３番目の姉が家族とともに、ハルピン郊外三裡樹（さんかじゅ）の開拓団にいたことが、満洲をより一層身近なものとした。姉からの手紙には、男は兵役が免除されることや、満洲は広々とした土地であること、岡山と違って冬の寒さが厳しいことなどが、したためられていた。いずれにせよ、姉夫婦の存在は、満洲への憧れをかきたてた。

家族の反応

しかし、母は貞子の満洲行きに反対であった。貞子の兄弟が兵役や結婚で家をでていただだけでなく、父が昭和 17(1942)年に病死していたからである。このうえ貞子が満洲に行くとなれば、母の面倒をみるものはいなくなる。また一番上の兄は、母とは異なる理由で反対した。兄は、当時神奈川県の陸軍病院にて療養中であったが、見舞いに訪れた貞子に、国勢があまりよくないから「行かないほうがよい」と諭した。さらに親戚を集めての親族会議の結論も同じであった。このように周囲がことごく反対するなか、貞子は女子義勇隊への参加を決めたのである。その理由を次のように振り返る。

いや、みんな親戚を呼んでね。まぁその、行かないほうがいいよということを言うたんだけど。まぁ、私としては「お国のためなら」いうて。その当時の教育っていうのは、軍国主義でね。お国のため、男でも女でもお国のためになれば家のことなんか考えないと。そういう教育だったから、あのう、国のためになるんだったら、小さい家のことはどうでもいいやっていうような考えだよなぁ。いまになればほんとに馬鹿だけど、まぁそういう考えで行ったわけ。

戦時下の教育は、国家を価値判断の中心にすえる思考パターンを、貞子に植え付けたようである。貞子は、家族の忠告に耳を貸さなかったことを、ひどく後悔することになるが、それはまたあとの話となる。

ただ、満洲へ行くといっても、8ヶ月の訓練が終われば帰国できるという話であり、貞子もそのつもりであった。「お母さん、全員 8 ヶ月終わったらすぐ帰って来るんだから、それまで留守番お願いします」という娘の言葉に、母もおれるよりほかなかっ

た。

満洲への旅だち

女子義勇隊に志願した貞子のために、村を挙げての盛大な歓送会が開かれた。会場は、小学校の新校舎にできたばかりの百畳の大広間であった。出征する兵士と同等、いやそれ以上の扱いに、「日本人としてまずいことはできない」と、気が引き締まる思いであった。昭和 19(1944)年４月 28 日、貞子は山陽本線万富駅より汽車に乗り込み、満洲への旅路についた。反対していた母も、万富駅まで見送ってくれた。

２．女子義勇隊訓練所での生活

訓練所までの道のり

岡山県の県庁でいっしょになった坂本先生に引率され、下関から関釜連絡船で釜山に渡ったのち、朝鮮と満洲の国境の町、羅津まで北上した。羅津では全国から集まった女子義勇隊の志願者と合流し、彼女たちの最終目的地、東安省勃利県にある女子義勇隊訓練所の所長に引率された。一行はまず満洲国の首都であった新京（現在の長春）へむかった。新京では、拓殖課の課長から満漢全席のフルコースでもてなされたのち、１日市内観光をした。そこで目のあたりにした満洲は、それまで聞かされていた満洲とはだいぶ懸け離れたものに映った。貞子は軽い失望を覚えた。

> うーん、だけど。新京、そうねぇ。新京の本部ってとこは、新京の忠霊塔か。あれがあって。忠霊塔があって、そこの前で写真撮ったかな、忠霊塔で。そういう満洲行って、そこらのあのう、満人のこう服装ね、それを見て、「ああいかに貧しい生活かな」っていうことを、私感じたね。うん。みんな着てる着物が垢で、光ってるんだよな、垢光りが。で、まぁ言葉でもわかれば言葉もかけられるけど、言葉わからないから、ただ見るだけだもんね。だからよく、特にみすぼらしいかんじが。（中略）ただその、人間的の、人間を見てさぁ。あまりにもこんな貧しい、国というか。やっぱり言葉ができないからそう思うかもしれないけどね。変な、ああこんなとこに来たのかなぁと私はちょっと、がっかりしたな。ははは、いう気持ちだったな。

満洲を肥沃な大地として想像してきただけに、垢光りするボロをまとう中国人の姿は衝撃的であった。ただ、その目にうつる貧しさが表面的なものであったことに、貞子はのちに思い至る。それは、敗戦後、中国人と世帯をともにし、言葉を交わすなかで、彼らの考え方に触れたからである。貞子は、言葉がわからなかったことにこだわる。視覚が切りとる満洲は、断片的なものであった。

女子義勇隊の一行は、新京から勃利にむかう途中、ハルピンに立ち寄っている。貞子はハルピンの開拓会館で、開拓団からでてきた、３番目の姉と会っている。姉からの手紙には、召集はないとあったが、このときには、夫を召集され、女手一つで広い

畑を耕していたようである。姉は「来たのはよく来た」「私も会えてうれしい」とねぎらいながらも、「訓練が終わったら早く帰りなさい」「母親ひとり残して、あんたどうすんだ」ととがめたという。満洲にいた姉夫婦を頼りにしていた貞子であったが、ハルピンでの姉との再会は、手放しで喜べるものではなかったようである。

満洲を旅するなかで膨らみ始めた違和感は、勃利の訓練所において決定的なものとなった。軍隊が駐屯する市内を離れ、さらに中国人集落からも離れてぽつんとたたずむ、煉瓦造りと土造りの２棟の建物、それが訓練所であった。貞子の目にまず飛びこんできたものは、訓練所をとりまく中国人集落の、次のような光景であった。

> だからそれがまた、ちょうど雨が降ってね。雨が降って、まぁ私の実家の岡山は、雨が降っても靴に土もつかないような、さらっとした、そういうなんでしょ。むこうはそうじゃなくて、雨が降ったら泥んこだ。靴も濡れてしまうんだ。そういうような泥んこのなかで、そんで、あの…、あひるや豚といっしょの生活なんだな。そういう、そういうとこを見たら、あれは豚もいれば、あひるもいる、がちょうがいて。家の周りにみんなうんちしてしまって、トイレはないんだよ。そうして、それを豚が食べてるんだよ。そんなの初めて見たから、よけいにがっかりした。まぁ、訓練所ではトイレは作ってあったけどね。市民の生活というのは、そういうような、トイレはなしだ。あれどうしてトイレを作らないのかねぇ？

それは貞子が思い描いていた肥沃な大地とはほど遠い、泥まみれの人間と家畜が一緒に暮らす、「未開」の大地であった。故郷と比べても格段に見劣りがする訓練所に、ひどく落胆はしたが、来てしまった以上、ここで暮らすよりほかない。貞子ははらを決めた。

昭和 19 年５月 10 日東崗屯女子義勇隊訓練所にて

訓練所での生活

訓練所の１日は、朝７時ころ起床し、８時から朝礼があり、８時半に朝食をとり、その後は農業班、炊事班、公用班に分かれて、各自作業に励むというものであった。農業班は訓練所の畑を耕し、炊事班は全員分の食事をつくる。公用班は訓練所が街から離れていたことから、街に買物や郵便物の受け取りにでかけたほか、所長の妹の子どもを学校まで連れていった。こうした訓練所に関係する作業のほかに、市内の兵隊の慰問、ロマノフカの白系ロシア人開拓団の見学、勤労奉仕などもこなした。勤労奉仕では、林口（りんこう）の紡績工場で羊毛製糸の体験実習を受けたり、勃利近くの開拓団の手伝いにでかけたりした。

決められた結婚

ある日、所長に連れられて、勃利の街に映画を見に行くことになった。所長は出かける前に「おしゃれして、みんなきれいにしてくださいよ、映画見て写真をとるから」としきりに注意した。映画のあと撮った写真は、訓練生に何の断りもなく、見合い写真に使われた。こうして本人たちが預かり知らないところで、見合いは進められた。所長と開拓団の担当者との話し合いによって、訓練生と団員の縁談が次々にまとめられた。訓練生の結婚相手が決まるたびに、例の見合い写真に写っている顔にマルがつけられていったが、貞子のところにはマルがつかなかった。結婚を断り続けていたからである。それでも所長に厳しく詰め寄られて、貞子は首を縦にするよりほかなかった。

そんでもう５ヶ月になるかな、５ヶ月になると、そろそろその話がでるんだ。あの、所長が、「あんた見てみなさいよ。男の人は１人で外国で、あの、働こうとしているのに、かわいそうじゃありませんか。」ってね。で、「私たちのできることというのは、ま、大陸の花嫁になってほしい」と。所長がそれを始めるときにそういうことを言い出したんだがな。しかしながら、私はその目的は知らなくて、「ただ、８ヶ月の訓練で帰るいう、母に約束して１人待っていますから、私は帰らせてもらいます」と。そしたら所長どう言われた？「もし帰るんだったら、憲兵に連れていってもらいます」と。そんで、ま、そう、脅かしか、そういう計画だったんか。脅しじゃなくてみんな計算づくだったか。だからこっちへ、満洲へこう連れて来た、かえすいうことはしないっていうことに決まっていたんだ。それを私は知らなかった。そんでそう言われて、憲兵に連れていって帰るいうことは、なんか自分は悪いことしたから、憲兵に連れていかれるんだと。それじゃあ恥ずかしいじゃない。ま、そういうわけで、ずっとがんばってたんだけど。「栗原さん、あんた見てみなさい。あともう、あんただけですよ」と、そういう言って、所長が言うんだ。「ほかの人は全部決まりましたよ。それでも帰りますか」。ま、そういう話だ。もうそう言われれば、憲兵に連れて帰って、恥ずかしい思いするよりか、結婚したほうがいいんだろうか。というわけで、もう否応なく決めたわけだ。

８ヶ月の訓練で帰れるという話であった。結婚は到底納得できるものではなかった。しかし戦時下にあって、憲兵に連行されて帰郷することの社会的なダメージは、計り知れない。また自分ひとりで帰ろうと思っても、日本までの旅費となる現金を持ち合わせていなかった。当時女子義勇隊には、日本政府と満洲国から補助金がでていたが、それらが訓練生に手渡されることはなかった。貞子はいまでもそのことをいぶかしく思っている。いずれにせよ、所長の脅しに屈するようにして、半ば強制的に結婚を受け入れさせられた。将来の夫とは、満洲の凍てつく寒さのなかで、ほんの数十分話しただけであった。

そうしたら、所長が、「誰々とふさわしいかな」と決めるのは、こっちとこっちの先生、ね。

この人にはこれがふさわしいかと、ま、ただ決めて。それから「自分で会って話してみなさい」っていうことなんだけど。いまみたいに、いくら会ってお話するとか、そういうことはぜんぜんないんだからね。そういうような。そんで、「じゃ、団からおりて来てもらって、話してみなさい」いうて。寒い寒い冬の、10 月だったんかなぁ。いや、11 月に、そう 10 月だよ。むこうの 10 月は寒いときに、あんた、部屋のなかはみんなでいるでしょ。そんで、そこらにコーヒー店とか、なんとかあるいうたら、何にもありゃしない。だから外へでて、その寒い風にさらされて、ちょこっと話したくらいなもんで。まぁ、どこがどうこう、恋しいとか、愛してるとか、そういうことはぜんぜんないじゃ。はははは。10 分か 20 分話したんでしょ。ちょっと寒い寒いで、もう寒い一方だよ。そんで、否応なく決めたわけで。

昭和 19 年 11 月 23 日の結婚式

「否応なく決めた」。この一言に、貞子のこの結婚に対する思いが集約されている。昭和 19(1944)年 11 月 23 日、貞子を含む訓練生と開拓団団員 50 組の合同結婚式がとり行われた。貞子が嫁いだのは、竜湖開拓団の佐藤忠寿という名の青年であった。

３．竜湖開拓団での生活

開拓団のようす

竜湖開拓団は、昭和 14(1939)年に勃利大訓練所に入所した第２次青少年義勇隊が、２年間の訓練期間を経て、昭和 16(1941)年、勃利郊外に入植したものであった。合同結婚式を終えた貞子たちは、勃利で１泊したのち、翌朝トラックに乗って出発したが、到着は夕方であった。貞子は早速、開拓団の８つある部落のうちの１つに入った。部落は 20 戸ほどからなり、大工を営む中国人の一家を除けば、日本人しかいなかった。

開拓団での生活

貞子が嫁いだころは、ちょうど開拓団が協同経営から個人経営に移る時期にあたった。佐藤夫妻も結婚から１ヶ月ほど経つと、約１町歩の土地をもらいうけて独立した。土地は、団員たちが３年をかけて少しずつ開墾したものであった。年が明けた昭和 20(1945)年、畑に大豆、粟、じゃがいも、とうもろこしを蒔いたが、収穫の喜びを味わう前に敗戦となった。畑は夫婦２人で馬を使って耕し、中国人の雇農を使うことはなかった。

農作業と家事に追われるうちに、１日は慌しく過ぎていった。貞子は新婚生活を振り返って、次のように語る。

だからいまいうように、好きなもの同士で一緒になったんじゃないからね。私は関西、むこうは東北、あははは。自分の思い、思いいうて。ま、何にも思い、いい思いはなかったな、ほんとに。で、結婚してね、何があるというと、包丁はあのロシア鎌、ロシア鎌で作って。ロシア鎌いうのはこんな大きなロシアの鎌でしょ。あれで包丁作って、持つとこをゴムでこう巻いてあった。そうしないと、ぱちっとひっつくから。そんでフライパンいうたら、スコップ。スコップをたたいて、４つ作った。それが、結婚の道具だよ、あははは。いま考えられないことだろうけど。そんで自分たちはどうしてやっていこうか、どういうふうにしようういう、そういう相談も何にもなかったしね。ただいうように、10 分 20 分の話して顔見た、いうくらいなもんで。まったく。

貞子にとっては、開拓団の生活は慣れないことばかりであった。特にオンドルの焚き方のコツがつかめなかった。家のなかでも、刺すような寒さに身を震わせた。満洲の冬の厳しい寒さ、それは何よりも耐え難いものであった。

団に入ってもお金使ういうて、使うとこもないし、えへへへ。だから私は決めた、早く帰りたいいうことを決めて、結婚してもやっぱり帰りたくなってしまって。そんで、なにしろ、その寒さ。むこう、マイナスで 40 度いう、45 度の零下、45 度のあの寒さ。岡山はあんた、雪がちらちらと降ったら、それで終わりよるに。その寒さには、私は耐えられなかったな。だから毎日、お金があったら、あしたでも帰るっていう、その気持ちだけで、「帰りたい」一方だった。だけどお金が１銭もない。

開拓団でも訓練所と同じく、現金をもたない生活であったようである。食料についていえば、米は団から支給され、野菜は貯蔵庫に蓄えがあった。肉は冬に猟で仕留めた猪を戸外で凍らせ、それを削ぎ落として食べた。同じ部落に住む中国人がつくる、餅のような菓子が食べたいときは、持ってきた着物と物々交換をした。

とにかく、貞子は帰りたい気持ちをつのらせるばかりであった。忠寿は「川辺に家を作り、柳を植えて、その柳を薪にして暮らす」という夢をもっていたが、貞子は満洲に永住するつもりなどなかった。夫婦の心はすれ違ったまま、忠寿の召集によって別れ離れとなる。「まぁ、ほんとにいい思い出は残っていない」。深いため息とともに、貞子は開拓団での生活を締めくくった。

４．敗戦前後の逃避行

避難のはじまり

昭和 20(1945)年８月９日、ソ連参戦の日、竜湖開拓団では、団長が避難命令をだした。戦局に関する説明は一切なく、１週間ほど避難するから、ちょっとした荷物を持って出発すると告げられただけであった。敗戦時、竜湖開拓団には 183 名が在籍し、

うち 116 名が召集され、残された 67 名はその殆どが婦女子であったと伝えられている。大半の男性団員が召集されていたなか、団長が残っていたことは、不幸中の幸いといえる。貞子は、着物や子ども、老人をのせた大車(ダーチョ)を馬にひかせて、団員たちとともに部落をあとにした。このとき忠寿の子どもを妊娠していた。

数日前から降り続く雨のなか、竜湖開拓団は午後から歩き続け、日暮れ前にどうにか、勃利大訓練所があった桃山(とうざん)に到着した。ここで万竜(まんりゅう)開拓団とともに２泊し、しばらく様子を見ることにしたが、雨は一向に降りやむ気配はない。そこで、これ以上ここに留まっていてもしかたがない、馬と大車を捨てて出発する、ということになった。貞子もここで馬と大車を捨てている。勃利までの途中、中国人の家に１泊し、そこで食事もだしてもらった。粟のごはんに、インゲン豆をつけたものであった。また中国人は大車をだし、貞子たちを勃利の駅まで送ってくれた。この中国人の行動が、金銭を払って頼んだものか、強制的にやらせたものか、貞子は詳しい事情を知らない。こうして勃利の駅に着いたが、いくら待っても列車がやってこない。長いこと待ち続けて、ようやく到着した列車は、屋根付きとはいえ貨車、しかもたくさんの避難民を満載して、身動きがとれぬほどに混雑していた。しかし、これを逃せば、次はいつになるか分からない。貞子たちは屋根によじ登り、列車に飛び乗った。

度重なる襲撃

列車が勃利をでて、５駅ほど進んだところであった。「ソ連が来たから早く降りろ、降りろ」という声に、乗客はみな一斉に列車から降りて、我先にと近くの山へ逃げこんだ。突然のソ連軍の襲撃に、貞子たちは、日が落ちて暗闇が支配する山のなかを、方角もわからないままに、あてもなくさまよい歩いた。草木はひとの背より高く生い茂り、どこを歩いているか、まったく見当もつかない。前のひとが歩いたとおぼしき道を、ただ辿って歩いているだけであった。特に子連れの婦人には、厳しい逃避行となったことを、貞子は次のように振り返る。

> そんで私はおまけに、あのう、３人の子どもさんを連れてる奥さんがいて。気の毒でしょうがないから、一番上の子どもひっぱってあげて。上の子は５歳くらいかな、４歳か５歳。下がまだ２人、坊やを連れてるから。そんで「私この子連れてあげるから、よう後来なさいよ」いうて。そんで連れていこうと、とっとっとと歩いてきたけど。あの子どもも何も言わずによく歩いたなぁと思う、一晩じゅう歩いたわ、その後は。だけどお母さんがもうそこで、「ありがとうございました。もう歩けないから、子どもを放してください。ここで私は少し休んで様子を見ます」いうて。そんでそこで、朝方になってお母さんに渡したんだけどね。まぁその子ども果たして、帰国できたか、亡くなられたか、中国の人に拾われたか。どうなってるかわからないけども、まぁかわいそうだねぇ、あのちっちゃい子が。３人連れてるんだから、どうにもならないわ。そんでまぁ、何もない、ぼそぼそ歩くんだけど。子どもが泣くと、兵隊さんが少し混じってたな、兵隊さんが「子ども泣かすな、子ども泣かすな」って。「子ども泣くとソ連に分かるから、襲撃されるから、子ども泣かすな、子ども泣かすな」ってそう

言ってたけど、あんた、子どもが泣かないわけないわね、そんなの。

日本兵はソ連兵に見つかるという理由から、泣く子どもが同行することを嫌った。子どもはただでさえ、手がかかる。子連れの婦人が、避難民の列から脱落していった。貞子たちは、山のなかを一睡もせずに歩き続けた。朝を迎えて気付いたのは、１晩かけて山の裾野を１周し、また元の場所に戻ったことであった。

それでも貞子たちはあてもなく、歩き続けるしかなかった。日暮れも近づいてきたころ、中国人集落にぶつかった。そこで夕食をご馳走になり、１泊することにした。翌朝、中国人集落をでようとした途端、ソ連軍と思われる軍隊に襲撃された。一行は散り散りとなり、貞子は５、６人といっしょに高粱畑に逃げこみ、襲撃をやり過ごした。しばらくして高粱畑をでて歩きだすと、竜湖開拓団の男２人と女２人が自決して「みずー。みずー」と叫んでいたので、貞子は自分の水筒の水を一口ずつ４人にあたえた。ほどなくして他の竜湖開拓団の人たちと再会した。

川での襲撃

ここで竜湖開拓団は大きな岐路に立たされていた。中国人の道案内が牡丹江への近道を知っていることを、中国語がわかる日本人が通訳したからである。結局一行は、中国人の道案内についていく組と、これとは別の道を選ぶ組の２組に分かれた。貞子はほかの女子義勇隊のメンバーとともに、前者の組に加わった。

中国人に先導されて、日が暮れるまで歩き続けた。やがて貞子たちは、２つの川の合流点に行き着いた。中国人の話では、渡し舟をとってこなければ、向こう岸に渡れないという。同行の兵隊が日本刀と銃を置き、舟をとりに、パンツ１つになって、川に入ったときであった。中国人の道案内が日本刀と銃を奪い、襲いかかってきたのである。身重の貞子は、列の最後尾で、ちょうどリュックサックをおろしていたところであった。中国人の襲撃に気付くと、必死の思いで走って逃げ、背の高い葦のなかに身を隠した。ここで最期と思い、持っていた写真を見ていたが、やがて銃声は途絶え、何も音が聞こえなくなった。おそるおそる葦原をでていくと、そこには誰もいなかった。ひとり残されたのである。しかたなく、貞子は近くの畑で野菜をとって飢えをしのぎながら、そこで３晩を過ごした。そのとき味わった言い知れぬ孤独を、貞子は次のように振り返る。

そうしていたけど、私のとこまでは撃ってこないし、何にも音がしなくなって、日は暮れかかって、何してるから。「みんなどうしただろう」と思って、私黙ってこそっと行ってみたら、「ヤァヤァヤァ」いうのが来たら嫌いうてたけど、行ってみたら、もう誰一人もいやしないの。誰もいないから。「あぁ、みんなどうなったんだろうな」と思って、もう私は一人ぼっちだから。あの大陸のなかに、あんた、外国人がただ一人ぼっちやな。さみしかったこと。誰もいない。そんで仕方ないから、あそこに麦畑があって、麦畑の麦を１つ取りだして、そこ

に自分を、身を入らせて。そのそこを引いたそれでドアにして、こう隠して、そこは１晩泊まったよ。そこで寝たよ。寝たいうて、寝るいうたって、おそろしい、１人だから、どうにもならん。だけどいつの間にか疲れて寝ちゃった。目が覚めた、目が覚めて出てみたら、狼かノロか分からないけど、そこをポーンポーンと跳んでるんだよ。「狼の餌食になるかなぁ」と思ったけど、むこうが行き去ったから、「ああやっと助かったかなぁ」と思って。

ま、おなかがすいてしょうないから、何か見つけようと思って、きゅうりを見つけたり、とうもろこしの生をとってきてかじったり。そして、どっかに日本人でも見つかれば誰かについて行こう思ったけど、誰ももう見つからない。そんでそこらしょうないから。道を歩くいうても、どこへ歩いてどう歩いていいかわからないから。しょうないな、雨がふるし。まだ雨が降ってるんだよ、もうあのときはほんとに涙雨だ。仕方なくて、そこらでなんか食べて、そこでごろっと寝て。そこに３晩くらい寝たかな。

３日目の朝、スイカ畑を見つけた。貞子はスイカを１つ盗み、雨をよけるために、畑近くに建つ小屋へ入った。スイカを置き、濡れた着物を絞ろうとした矢先のことであった。小屋に２人の中国人が入ってきた。貞子はとっさに大きな竈のなかに隠れたが、置いたスイカに気付いたのか、すぐに見つかってしまった。中国人はまず貞子がお金を持っていないか体を擦り、持っていた少しばかりのお金をとりあげた。つぎに「おまえ行かないなら、殺すよ」と手まねをしながら、貞子を引っ張る。貞子は覚悟を決めて、中国人について行くと、食事をだされた。トウモロコシのごはんに、ジャガイモをつけたものであった。しかし折角の食事も、恐怖心とつわり、それに香菜のにおいがたまらず、一口も食べられなかった。すると中国人は貞子を車に乗せて、さらに遠くへと連れていった。

依蘭の日本人収容所

６時間も車に揺られていただろうか。着いた先は、三江（さんこう）省依蘭県の日本人収容所であった。収容所の門番は、泥沼のような水たまりに突き飛ばし、転ばしては銃をつきつけて起こし、起きてはまた突き飛ばすといったことを繰り返して、貞子をいたぶった。幾度も転ばされて、泥団子のようになったが、おなかの子どもは不思議と無事であった。門番は新兵のように見えた。やがて幹部がでてきて、「日本人民が悪いわけでない」と門番を諭した。幹部は日本語ができた。そして貞子の泥だらけになった服を着替えさせ、軍隊の上等な食事をだしてくれた。米のごはんに、餃子や豆腐が添えられていた。しかし折角の食事も、やはり喉を通らなかった。

収容所では、川で中国人の道案内に襲われたとき、彼らの通訳をしていた日本人と再会した。彼女が林口から避難してきた、竹内（たけうち）という名前であることを、このときはじめて知った。貞子には竹内に聞きたいことがあった。襲撃された仲間の消息である。

そうしたら、ここ（=収容所）にいたから、「あんたどうしてここに来たの」というたら。兵

隊さんの、死んだ兵隊さんの車に乗せられて、ここが収容所だいうて、ここまで送ってこられたっていうて。そんで「他のひとはどうしたの」いうたら、「みんな死んだら、真っ裸にして川に放り込んだよ」って。「だからみんな死んだんでしょ」っていうんだよな。

この竹内の証言とその他の状況を照らし合わせて、貞子はあのときの襲撃を、いまは次のように考えている。

そういえば、そうだ、いまだにずぅっと、返事もない便りもない、何もないから。やっぱり字が書けないわけでもないし、そこで亡くなったんだろうっていう。そんでまぁ、私たちのそこは全滅だ。こっち分かれたのが 20、20 人以上いたでしょう。残ったのはむこう行った兵隊さんだけ、残っとるんじゃろ。それから、私とその竹内さん、あとはぜんぜん、音も沙汰もない。まぁよくもだけど、鉄砲の弾も当たらないで、どこもケガしないで、よく逃げられたなぁと思う。

依蘭の収容所には、1 ヶ月ほどいた。毎日少量の粟が支給された。それを各自で、拾ってきた缶や鉄カブトを鍋にして、炊いて食べた。そのときにはもう日付の感覚はなくなっていた。日本が敗戦になったことさえも知らないまま、時間だけがむなしく過ぎていった。

決死の脱走

そんなある日、「日本人を本国に送還する」という命令がでた。ついては依蘭から勃利にでて、そこから列車に乗るとのことであった。貞子は竹内と喜びを分かちあった。しかし勃利で待っていたのは、日本行きの列車ではなく、収容所であった。勃利の収容所はソ連軍の監督下にあり、夜になるとソ連兵による強姦が絶えなかった。貞子と竹内、それに長野県出身の女性を加えた３人は、収容所からの脱走を決意する。貞子はそのときの経緯を、次のように振り返っている。

それで夜は、あんた、みんなソ連のひとが来て、そんでみんな若いものをみんな連れて行ってしまうんだよ。そんで、髪を切ったり、鍋を、顔を真っ黒にして炭を塗ったりしてても、やっぱり女はわかるんだな。女は女だ。わかって連れて行かれて。ある１人のきれいな、西洋人みたいな顔をしとるひと。そのひと連れて行かれて、帰ってきて「もう私は死ぬわ」いうて、首吊りしたんだけど、死ねなくて。死ねなくてまた生き延びたんだけど。

ま、そういうつらい悲しい思い出。もう私たちはどうするっていうて。３人、その竹内さんと私ともう１人の長野県のひと。私たち３人はもう、生きても死んでもいいから脱走する、いうことにして。じゃあそうして、トイレに行くふりして脱走しようやいうて。さぁ３人で脱走したんだわ。

そこにまた１週間くらいいたと。だけど、どうにもならない。毎晩のように泣いたりわめいたり、たいへんだから、もう脱走するって、脱走して。だけどうまく脱走できたもんだな、見つからなかった。それで１人も、誰か撃たれたとかどうでもなくて。

５.「中国残留婦人」となって

中国人集落へ

勃利の収容所を無事脱走した３人は、貞子がもといた訓練所を目指し、さまよい歩いた。靴も履かずに裸足で歩き続けた末に、七台河という中国人集落に辿り着いた。地主の家を見つけた貞子は、ここで世話になることにした。ほかの２人は、地主の紹介でそれぞれ別の中国人の家で養われることになった。長い逃避行の間に、貞子の着物はボロ１枚となっていた。戸外の仕事では寒さに耐えられなかったため、トウモロコシの皮むきなど室内でできる仕事で、どうにか糊口をしのいだ。

董長勝との結婚

昭和 20(1945)年も 12 月となり、貞子は臨月を迎えていた。それは 10 日の朝のことであったか。貞子が水汲みにでかけると、日本語も中国語もできる朝鮮人が、中国人との結婚を勧めてきた。そのときのやりとりは、次のようなものであった。

（朝鮮人が）「佐藤さん、こんな体してどうするんですか」っていうから。「どうするもこうするもないじゃないのよ。こんな」。「それよりか、お寺の前でお産して死んだひとを見たか」っていうから、「ああ、見たよ」っていったら、「ああなっては、親子ともども、だめになって、何にもならないから、それよりか中国人のひとを見つけて、なんとか冬越しをしたらどうですか」っていう話がでたの。ああそうか、それもそうだなと思って。じゃあそのひとに「あんた、気のいいひとで、たまにはお米のごはんが食べられるくらいのところに世話してちょうだい」って。そんで「帰るときは帰らせてもらう」と。それが条件でよかったら、そういうとこ探してもらういうことで。

「出産するには、中国人と結婚して環境を整える必要がある」、この朝鮮人の言葉には説得力があった。貞子は結婚相手に求める条件として、性格、経済力、そして帰国を許してくれることを挙げて、結婚の斡旋を頼んだ。翌日には、朝鮮人が結婚相手を見つけてきた。先方に条件は伝えてあるという。また竹内の中国人の夫も、貞子の結婚相手に太鼓判を押していた。竹内は、貞子より先に中国人と結婚し、食事と着物を与えられ、安定した生活を送っていた。こうして貞子は、朝鮮人が勧める男、董長勝との結婚を決めたのである。

中国人のあたたかさに触れて

長勝は妹１人と弟２人、４人暮らしであった。言葉も何もわからず嫁いできた貞子を、董家の人びとは暖かく迎え入れてくれた。なかでも妹が優しかったと、貞子は語る。

そうしたらその妹が、とっても優しい妹で。ごはんを、自分で作って教えてくれて、これはこういうふうにやるんだ、ああいうふうにやるんだ、教えてくれて。そんでやっとこさで、なんかごはんができるようになったかな。それまでずっと手伝ってくれた。そんで、まぁ行ったらすぐ新しい、新しい綿入れを全部作ってくれて、靴も作ってくれて、履かせてもらって。まぁその暖かかったこというたら、まぁほんとに忘れられないわ。まぁ寒いのに、あんた着のみ着のままで４ヶ月だよ。そんで４ヶ月のまぁ虱だらけの、その着物をよくはがして、新しいの着せてもらって。あれぐらい暖かくてうれしかったことはないな。

このとき受けた歓待との対比で、思い出されることがある。これまでの人生で味わった、貧窮のみじめさであり、周囲の反対を押し切って、満洲行きを決めたことへの後悔である。貞子の語りはこう続く。

だから物があんまり豊富いうと感じないけど、ないっていうときは、ほんとにつらい。そうすると、地主のひとの奥さんなんか、綿をきれいにして綿入れを作っているんだよな。そのひとの、ひとのうちの灯りを見るとうらやましくて。綿入れは作ってる、灯りはある。我々は家もないし、何もないし、綿入れはないし。あの辛い思い出はほんとに忘れられないな。だからいまも少しのもんでも、なんでも、こうとっておっていうと、「お母さん、いまは時代が違うんだから、そんなもの捨てていいよ」いうけど、捨てられないな。捨てるともったいない。あのときを思い出す。だからなんでも、とっておく。もう何回丸裸になったか、分からない。生まれて丸裸、そのときまた丸裸。今度帰国してもまた丸裸、なんにもありゃしない。あぁー、嫌なもんだった。

そんで前ちっと言い忘れたけど、私の姉が、勃利の訓練所に１回来てくれたんだよ。それがもう最後だった。もう姉に会えない。だからいろんな思い…。行くな、行くなって兄がいうし、親戚のひとが行くなっていうのに、自分は行きますっていうた、そのバチが当たったと、私はそう思ってる。バチが当たったんだ。だけどまぁ、いい中国人のひとに会えて、出会えて・・・。

長勝との結婚は、貞子のおなかの子にとっても、救いであった。貞子の語りはさらにこう続く。

そこのうちに行って 10 日目にもう子ども生んじゃった。13 日か、10 日に行って 13 日、13

日後には子どもが生まれて。まぁ自分の子と同じような思いで、あんた、大事にしてくれてさ。で、乳がぜんぜんでないんだよ。そういう状態だから、乳がでないのも当然だろう、気持ちはなんだし。そんでもらい乳してさ、もらい乳して育って。「もう誰かにあげてくれ」と。「もうこうして死んでしまうのもかわいそうだから、誰かにあげてほしい。もういいから」と。そしたら「あげるっていうことはしない。なんとかして、もらい乳して育てばそれでいいんだ」と。そんでやっぱり育ってくれたんだな。だからほんとにありがたい。いまのいままで、親子いっしょにどうでもないってね、ここまで来たってことは、ほんとにいろんなひとのお世話で生きてこれたなぁって思うけど。まぁ養父のおかげでそうなって、助けてもらったわけだ。だけど、そこに入ってなかったらもう、ぜんぜんいままで生きて、ここまで生きてということはできないわな。

こうして「いい中国人」と世帯を構え、徐々に言葉を覚えていくなかで、貞子の中国人観は次第に変わっていった。１つ前で引用した、長勝への感謝の言葉に続けて、貞子は中国人について、次のように語る。

そんで中国のひとはおおらかなんだよな。とても人道的だよ。あのう、その言葉のできないときにはさみしい、そういう思い、嫌だなっていう感情もあったけど。実際に入って言葉ができて、何するいうと、ほんとに人道的でね。自分はどうでもいいけど、まぁかわいそうだからいう、そういうなにがあるんだわね。だから大事にしてもらって。何したから、よかったなぁって。現在があるなぁと私は思ってるんだけど。あのう、乞食が来たら、自分が食べるものがあったら、半分はあげてくれって。そういうふうに見てた。（乞食が）来ても見下げるもんじゃない。それとかののしって帰らすもんじゃないよ、と。なければ仕方ないけど、自分の食べるもんが少しあったら半分あげてくれと。そういう人道的な、あの、学問はないよ、学問はない。文盲だけど、あの人道的なの、ほんと私。「ああやっぱりそうだな、自分のことだけを考えないで、ひとのことを考える」って。やっぱりそういういいひとにぶつかった。まぁみんながみんなそうなのか、それともどうか、私はそれわからないけど、まぁだいたい的に、中国のひとはおおらかだ。うん。いいひとにぶつかったなぁと思う。そんでやっと命拾いしたわけや。

ここには、かつて「新京」で見た「満人」とは異なる、「中国人」がいる。そして、貞子が「中国人」の人道的で利他的な性格を思うとき、いつも夫長勝が投影されているのである。

帰国を思いとどまる

1953(昭和 28)年に、日本への帰国の話がでたときも、長勝は結婚当初の約束通り、帰国を許してくれた。ただし、長勝との間に生まれた次男は、中国に置いていくことが条件であった。貞子が長男を連れて帰国すれば、親子、兄弟がばらばらになってし

まう。また長勝に命を助けられた恩もある。さらにたとえ帰国したとしても、親も土地もない。これらの状況を総合的に判断して、貞子は日本への帰国でなく、中国で長勝の家族とともに暮らすことを、選んだのである。そのいきさつは、次のようなものであった。

それであの、帰国するいうことのあって。「帰るかどうか」っていう。「帰るんなら、新しい着物作って、帰るんなら帰りなさい」と。そういうたけども、もうその当時２番目の子供もいたし。「長男はまぁ連れて帰ってもいいけど、次男は置いてもらう」。そういうまた親子の別れ別れのつらい思いをしてもなんだし。いままで助けられたからいうて、自分の気ままっていうか、そのまんまでさようならっていうこともできない。やっぱりむこうが人道的なら、こっちも人道的になろうという気持ちもあって。やっぱり帰りたいのはやまやま。しかし、いまから帰っても親はいない。帰って自分で暮らすいうても、畑はない、何もない。どうするんだ、やっぱりここで我慢しようか、そういう気になって、まぁいままでいたんだけどね。

農村生活の苦労

中国で暮らすことを決めたものの、董家のような貧しい農家の生活には、苦労が絶えなかった。まず一番つらかったことは、臼挽きである。臼で挽いて細かい粒にしなければ、主食のトウモロコシは食べることができない。両手で抱えられないほど、大きな臼を、毎日回さなければいけなかった。つぎに井戸の水汲みが重労働であった。水を汲む容器は柳で編んだカゴであった。そのため１回に汲める量が少なく、カゴから漏れる水で足場は氷の山となった。よく滑り、危なかった。夜は家族の服を繕わなければならない。服は着たきりで、１人につき１、２枚あるだけだからである。必要な布切れさえも十分になく、自分の服はいつも後回しになった。さらにマッチの１本もなかった。そのため火鉢に火種を置き、その火種を吹いて、竈やランプに火を灯したのであった。こうした生活の苦労の一つ一つを振り返って、貞子は次のような感想をもらしている。

だけど、まぁよくそれに耐えてきたもんだと思うな。だから親の言うことをきかないから、バチが当たってこんな、ははは。いやぁー、だけどいまは苦しいは、どうはいうけど、あんな苦しい思いはない。原始時代の生活から始まって、やってきたもんだから。

昼は臼挽きと水汲み、夜は服の繕いと、貞子は昼夜休みなく働いた。また子どもが大きくなってからは、家の外に働きに出るようになった。貞子は字が書け、ソロバンができたため、人民公社で会計をつとめたこともあった。ただ人民公社に対して、貞子は総じて否定的である。

そうそう、人民公社、人民公社で働いて。人民公社いうたら、働いても、1985 年だったけな、

１年働いて、誰も１銭にもならない、そういうことがあるんの。働いても働かなくても、みんな蹴飛ばしてしまったという、そういうまぁ、なんという、ははは、やりかただろうねぇ。結局は働いてもなんにもならなかった、１銭にもならなかった。そんで人民公社に何するときに、やっと馬を飼って車をとりだして、畑もできたわっていう、一生懸命働いてそうしたら、それをみんな人民公社に入れろっていうでしょ。だからもう、みんな人民公社に入れたでしょ。そんでなんにも、いまはなんにも無くなって。あぁ何回も何回も裸で。

満洲経験とは

中国で長年暮らすなかで、貞子が日本人であることで困ったことは、２つあった。１つは、遠方にでかける時に、公安局の許可が必要だったことである。いま１つは、貞子の子どもたちが、日本人であるといわれて、いじめられたことである。貞子が日本へ永住帰国してからは、孫たちが、今度は中国人であるといわれて、いじめられた。こうした子や孫たちの姿を見るにつれ、貞子は自分の満洲経験に、深い疑問をもたざるを得ない。

そう、学校に入るといじめるんだよな。「日本人だ、日本人だ」。だけど、ほんとだよ。その当時は日本人だという。今度は帰ってくれば、中国人だという。孫たちは涙流していたよ。帰ってきてばっか、言葉ができないだろうし。一生苦労の…。（満洲行きは）お国のためにもならず、自分のためにもならなかった。国は帰ってくれば厄介者が帰ってきた、とね。なんにもならなかった。自分のためにもならなかった。まぁしかたないよね、ほんと。

貞子の人生は、女子義勇隊として満洲へ渡ってから、苦難の連続であったように思われる。開拓団団員との結婚、敗戦後の逃避行、董長勝との結婚、そして日本への永住帰国。人生の節目を迎えるたびに、満洲経験は大きな重荷となって、覆いかぶさってきた。貞子にとって、満洲経験はいかなる意味を持つのか。最後にそのことを確認して、本文を締めくくりたい。貞子は次のように語る。

だから、あの、前にも言ったように。満洲へ行って、満洲を日本人のものにしようと、こう上のひとは考えていたらしいけど。われわれ国民に対しては、満洲へ行って（も）なんにもならなくて。やっぱり命だけが助かって帰った、ね。満洲のためにもならなかった。日本の国のためにもならなかった。もちろん自分のためにもならなかった。なんにもならなかったということに、結局はなるでしょ。

あのう、言うように、満洲と仲良くして、五族協和のひとがみんな、ずぅと仲良くなってきたということなら、行ってよかったと思うんだろうけど。そうでもなく、なんにもならなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

聞き書きを終えて

これまで満洲移民経験者から話を聞く機会は何回かあった。しかし栗原貞子さんのように、日中国交正常化以後に帰国された「中国帰国者」から話を聞くのははじめての経験であった。そのため貞子さんの滔々たる語り口に圧倒されるままに、満洲行きから逃避行までを聞くのに時間をかけてしまい、肝心の「残留体験」や日本に帰国した後の話などはほとんど聞けていない。このような不備はすべて、聞き手が責めを負うべきものであり、まずお詫びしておきたい。

とはいえ、貞子さんが語る満洲行きのいきさつや満洲経験にじっと耳をすませてみると、そこにはやはり「残留」や帰国後の経験がこだましていることに気付かされる。貞子さんが「中国人」を語るときに、特にそう感じる。満洲国の首都新京で目の当たりにした満人にひどく失望したと話すかたわらで、彼らの言葉を解しなかった自分を振り返るのは、敗戦後に結婚した夫、董長勝さんとのあいだに、言葉を通じた理解とそれを越えた固い絆が生まれたからであろう。さらにその絆がかけがえのないものとなったのは、貞子さんが敗戦後の逃避行やその後の「残留」で、「丸裸」と形容するよりほかない、どん底の生活を経験したことと無縁ではないだろう。そして「満洲経験は無駄であった」と総括する口吻には、日本帰国後に味わった失望と無念の思いが込められている。

こうして貞子さんのひとこと、ひとことを振り返ってみて感じるのは、彼女が中国（人）や日本（人)、そして満洲について抽象的に語っているときも、つねに「残留」や日本帰国でであった人びととの具体的なつながりを強く意識していることである。今回の聞き書きでは、夫長勝さんへの思いを辛うじてとりだしたに過ぎないが、それでも、そこからは「日本人だから」「中国人だから」といった国民性の問題に収まりきらない、中国農村での生の様相がうかがえよう。したがって、貞子さんの人生にとって重要であった人びとへの思いを、１つずつていねいに聞き取っていくことが、何よりもたいせつになってくる。筆者としては、「中国人のあたたかさに触れて」と題した箇所を、特に熱心にお読み頂ければ幸いである。

最後に、要領を得ないインタビューに、長時間しんぼう強く付き合ってくださった、栗原貞子さんに厚くお礼申し上げます。そして、私たちふたりのやりとりをじっと見守ってくれた三毛猫とともに、再び貞子さんのお話に接する機会が１日もはやく訪れることを祈りつつ、ひとまず筆を擱くことにします。**（いのまた　ゆうすけ）**

基本データ

聞き取り日：2003 年３月 10 日

聞き取り場所：栗原貞子さんのご自宅

原稿脱稿：2003 年８月 10 日